

キャンピングカーで

ハッピースローライフ



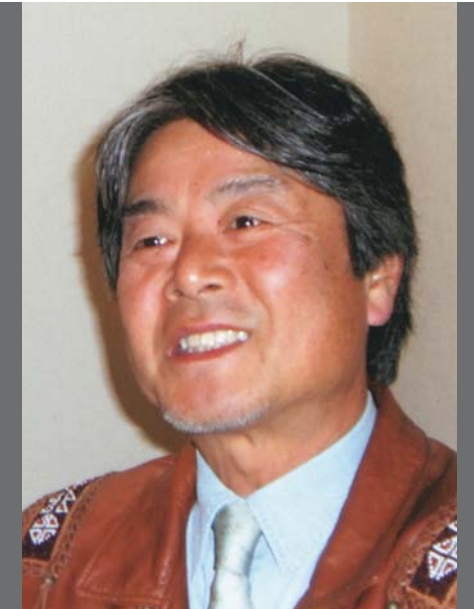
マイク真木

1944年生まれ。フォーク歌手。俳優。
1966年に『バラが咲いた』で100万枚以上の大ヒット。
他に『気楽にいこう』『キャンプだホイ』などヒット曲多数。



増田英樹

1951年生まれ。日本RV協会会長



マイク真木さんの生き方は 団塊の世代の憧れ

【増田】キャンピングカーショーの来場者にも、50歳以上の人たちが急に増えてきて、“アクティブシニア”と呼ばれる活動的な団塊の世代に、キャンピングカーがブームが巻き起こりつつある感じなのですが、こういう傾向をマイクさんはどう思われますか？

【マイク】日本にも、ようやく欧米型のライフスタイルというのが定着してきたということ

なんでしょうね。

僕はハワイにも暮らしましたし、アメリカにもよく行っているのだから分かりますが、アメリカ人は、働いているうちにもう定年後のライフスタイルを考えているんですね。キャンピングカーを使って、ゆったり全米を旅するなどというの、そのひとつです。

ところが、日本人は働くことを優先する文化のなかで生きてきたから、今まではなかなか定年後の暮らしをイメージすることができ

なかった。

それが団塊の世代が大量に定年を迎えることになって、ようやくリタイア後の人生を考える気運が生まれたということではないでしょうか。

【増田】そういった意味で、私たち団塊の世代の人間は、マイクさんの生き方からいっぱい学べるように思うんですよ。

海辺に家を持ち、釣り、サーフィンを楽しむ。キャンプもお好きですね。家もご自分

でカントリー調にリフォームされたり、お米まで自分でつくられている。そして空いた時間には絵を描いて楽しんでられる。

まさにスローライフとかロハスとか、DIYの精神を生かしながらローコストでマイペースで生きていくという、今の時代に望まれているライフスタイルにぴったり合った生き方なんですね。

マイクさんのライフスタイルを見ると、まさに定年後の「豊かな人生」というものの

理想像を実現しているように感じられます。

私たちマイクさんに憧れる世代は、いまだにマイクさんの生き方に学ぶべきところが多いように感じるんですよ。

【マイク】いやあ(笑)。若い頃から生き方はそんなに変わっていないんです。あまり先のことを考えず、あくせくしない生き方をしてきましたから。

そもそも「バラが咲いた」というヒット曲も、自分で必死に売り込んだものじゃないんで

す。あれは、別の人が歌うはずになっていたんですよ。僕は代役でデモテープを作っただけ。

そうしたら、プロデューサーの人がそれを聞いて「マイクの歌でいこう」ということになってくれたんですね。だから、スキー場のバイトから帰ってくる時、クルマの中でラジオを付けたら、いきなり僕の歌が流れてきたので、びっくりしましたよ。すべて成り行きまかせの人生です(笑)。



マイク真木さんは、アウトドアライフの達人。左は庭に置かれたバーベキューグリル。右は手作りのツリーハウス



マイク真木さんの手掛けた絵。時間があれば絵を描くのが趣味。ハワイで暮らした頃の印象を表した「ハワイアン・サン」

気楽にいこう、のんびりいこうという呼びかけは、今の時代へのメッセージとして必要なんだと思います。

マイク

Mike Maki



キャンピングカーが「シニア文化」を創造する

【増田】そんなマイクさんの生き方を上手に表現された歌が、CMソングとしてヒットした『気楽にいこう』でしたね。

確か鈴木ヒロミツさんが、ガス欠のクルマを後ろからのんびり押していくという石油会社のCMでした。

【マイク】あれは1971年頃だったと思います。ちょうど日本が高度成長に疑問を感じ始めた時代で、「物ばかりあふれる便利な社会に幸せはあるのか?」ということをみんな考え始めた時代でしたから、ああいう歌がインパクトを与えたのでしょうね。

【増田】それこそ、今の時代に求められる考え方でしょうね。地球の温暖化、石油エネルギー枯渇への危機など、我々がスピードを上げて求めてきた文明の進歩が裏目に出そうな時代になっていますよね。

マイクさんの「気楽にいこう、のんびりいこう」という呼びかけは、20年以上前の曲にもかかわらず、今の時代へのメッセージ



として必要なんだと思います。

団塊の世代は、がむしゃらに働く模範をつくって後の世代に示したけれど、次は豊かな余生を送るという模範をつくらねばならない。そういう時代が来ましたね。

【マイク】とにかく、団塊の世代がはじめて「仕事」を離れるわけですよ。働きバチだ

った彼らは、今まで仕事や会社を離れた視点で社会や地球を見ることがなかったと思うんですよ。

それが、ようやく自分の外に広がるいろいろなものを、ゆっくり眺める時間が取れるようになったわけですね。仕事に追われていた限りは、そんな時間は取れませんから

ね。
【増田】その「ゆっくり眺める時間」というものを、今彼らがキャンピングカーに求めているように感じるんですね。

今度の「キャンピングカー白書」の調査でも分かったことですが、キャンピングカーの旅で実現したいことは「気に入った場所を見つけて、のんびり滞在したい」ということなんですね。また、一般道をゆっくり走りながら、日本一周してみたいという人たちもいる。

子育てを終わったシニア夫婦を中心に、今そう望む人たちが増えていることが分かったんです。

私たち日本RV協会でも、そのような動きに呼応して、キャンピングカーライフを楽しむ方々へのソフトの充実をいろいろと進めてきました。

たとえば、お客様の利便性を向上させる目的で「くるま旅クラブ」という組織を発足させましたし、そのクラブの会員になることで、日本全国のホテルや旅館の温泉施設

をリーズナブルな料金で使用できる「湯YOUパーク」というシステムも整備しました。

実際に、このクラブに入られて「湯YOUパーク」を利用されるシニア夫婦が増えています。

まさに、キャンピングカーが「シニア文化」を花開かせる時代がいつにきたという印象があるんですね。

「ありがとう」を言い合える夫婦になろう

【マイク】基本は「夫婦」ですよ。僕は離婚も経験しているから(笑)よく分かるんですけど、夫婦が円満でいてこそ、家族も一体となる。

しかし、日本人の夫婦は仲は良くても、愛情表現がうまくないので、誤解も生まれやすいですね。

別に、アメリカ映画のように家に帰ったら抱き合うなんてことをしなくてもいいんです。ただ、感謝したい気持ちが生じたとき

に「ありがとう」という一言をいうだけでいいんです。

僕はこの前『ありがとう〜こころのパラ〜』という歌を作ったんですが、それは日本の中年男性は、なかなか「ありがとう」という言葉を出せないと感じたからなんですね。いまだにテレだとかカッコ付けがある。

しかし、この一言をいうか言わないかで、決定的に違ってきますよ。

僕は、これからキャンピングカーで日本一周しようと計画しているご夫婦の方に言いたい。旅行中に、相手が何か良いことをしてくれたら、素直に「ありがとう」といましょう。

【増田】大事なことですね。私は、団塊の世代にキャンピングカーが普及することは、それによって個人としても豊かな時間が持てるようになるだけでなく、今まで日本に存在しなかった新しい夫婦像が生まれるようにも感じています。



Hideki Masuda

「ゆっくり眺める時間」というものを、今彼らがキャンピングカーに求めているように感じる。

増田